

遠月に入って間もなく【十傑】第十席になりました。

ヘビトカゲ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

主人公がいきなり第十席になって、そこからなんか色々ある話。

2 話 1 話

目次

3 1

1話

どうも、僕の名前は野走つて言います。父親が一流料理店のシェフということもあり、料理に対して関わる日々は無いくらいに料理と親しみを感じていました。そんな僕も、もう高校生、何処の高校に行くことになったのかというと、母親が「料理学校なら、ここにした方がいいわ」と言ってきたので、親の意見を尊重してここ【遠月】に決めました。まあ、本当の理由は行きたい高校があるほど明確な料理の目的が無かったからなんです、料理を作るのは楽しいんですけど。

いや〜でも〜まあ、その何でしょう。

『……………』
人生は何が起こるかわからないって言うのは本当ですよ。自分では予想できない事が突然起こる、だからこそ人生は楽しいのだとも言えますが、それは同時に驚きと困惑を生むわけでありまして……………。

「……………あは」

おおっと、笑ってしまいました。でも今の自分に置かれている環境からして笑ってしまうのは仕方ない事だと思います。遠月には【十傑】という代表的な存在の料理人がいると聞いていました、十傑……響きがいいなあ、かっこいいなあ、と何気なく考えていたのですが。

まさか入学早々、その方々に呼び出されるとは予想できませんでした。

今もこうして、右、左、前に、僕に視線を集めながら十傑の方々が座っているのですが……すごい気まずいです、こんな感覚滅多に味わえないですね、味わいたくないんですけど。そもそも、呼ばれた理由が良く分からないんですよ、遠月に入学するには料理試験というものが必要らしくて、ついさつきまで僕もその試験を受けていたところなんです。で、合否を判定する人に食べてもらって合格か、不合格か、決めるんですけど。他の方々は合格、不合格、ときっちり言われてたんですけど、僕の場合は何故か、何も言われなまま近づかれて、

「ついて来てください」と言われたんですよ、そしてついて来た結果がこれ、何これ？何なんでしようか？アレですか？僕の料理が驚くほどに不味すぎたから、十傑の方々に酷評させて、惨めな気持ちにさせようっていう感じですか？んー、結構自信はありましたけど、流石遠月、料理の平均レベルが高いって事なのですね、はい。これはもう帰った後、母さんになんて言えばいいんだろうなあ、まあまだ決定したわけじゃないんだけど、他にこんな状況になる理由がわからないし。

「えつと……紺橋 野走君だよね？」

「あ、はい」

白い髪が綺麗な人だなあ〜顔もかっこいいし、絶対モテてるな〜、ってこんな呑気にしててもいいのか？まあ、いいか。

「突然呼び出してごめんね、これには訳があるんだ、君には【十傑】第10席へ任命するためにね」

「あー、なるほど〜〜〜ん？」

んー？話がイマイチ飲み込めない〜。

2話

これはどういう事なんですか、僕を十傑の第10席に任命したんですか…うん、心のなかで復唱してみましたけど、理解できないのは変わりません、それが当たり前ですよ。もしも、この白髪の方が言われた事が本当ならおかしな話です、確か遠月の十傑に選ばれる方々は、学園内で優秀な、華やかな成績を収め、貢献している方達です、なのに入学したばかりの僕が第10席になるって事は、伝統違反、ルール違反ってことになる気がしますよ、僕なんかより凄い人は遠月の中に居られると思いますから。

「野走君？僕の言葉意味、理解出来てるかな？」

「あー、はい、はい……」

まずい、まずいですねー、なんででしょうかこれ、威圧的？威厳的なオーラを放っていらっしやるこの方。そしてそれと同様なオーラを放ちながらずっと僕の方に視線を向けて来られている他の方々。どうしましょう、何とかこの場で「お断りしますー」とは言えない雰囲気…気まずさだけが針のように突き刺さるこの感覚ー、いや〜〜帰りた〜い〜。

「これは君にとつても良い話なんだ、将来を考えたとしても十傑の席に座れているという功績は必ず役に立つ。だから、難しい事は考えずに頷いて返事をするべきだと思うよ」

「あー、はい、わかりました、十傑第10席の任命を受け取らせさせていただきます」

言ってしまったよ、受け取ってしまったよ、完全に押されましたね、雰囲気呑まれてしまいました。この方々何が気になるかという目、目が凄い、なんか獣のような野生的な視線を一齐にぶつけられたら…まあ、こうなりますね、もう仕方ないです、諦めます、入学早々、僕は遠月第十席になりました、なっつてしまいました、この現実を暖かく、穏やかに受け止めることにしましょう。まあ、受け止めたくないんですけどね、これは心が落ち着くのに時間がかかりそうです。

「よしーじゃあ決定だね。これで君は、今日から僕達十傑のメンバー

になった、僕の名前は、司 瑛士、改めてよろしくね野走君」

「…よろしく願います」

「取り敢えず、今から十傑になるという事についての詳しい説明を僕がしていくから良く聞いててね、長くなるけど」

「ああ、はい、わかりました」

「んじや、私らはもう行くぞー、ていうか最初っから司一人で十分だっただろー」

「全く…時間の無駄だったな」

「ももには、どうでも良い事だった…」

あー、二人きりになってしまった、人数は減ったから緊張が解けると思ったけど、変わらないですね、でもまあ、慣れていく、慣れるしかないんですけど……。